

小学校英語指導者を支援する : 地域貢献セミナー 報告

著者	藤原 真知子
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.26
号	No.3
ページ	12-13
URL	http://doi.org/10.15052/00002902

小学校英語指導者を支援する -地域貢献セミナー報告-

藤原 真知子

はじめに

筆者は、聖学院小学校の英語教育実践を伝えるさまざまな機会に恵まれてきた。特にセミナーや研修会は、参加者の方々の反応が直接わかるまたとない機会となっている。

2014～2016年度は、ほぼ年2回のペースで山梨県立大学地域交流研究センターの主催する小学校英語指導者育成セミナーで、同僚英語教員のブライアン・バード氏と講師を務めた。表1に、その日程と内容を示す。

セミナーは、時間的にも制約の多い小学校教員を対象とした地域貢献プロジェクトの一環として開催された。日ごろ聖学院小学校で行っている英語教育のエッセンスを最大限伝えようと努めた。

本稿では、多岐にわたる内容をいくつかの柱に整理した上で、主催大学の受け止めや活動の展開から、講師として感じたことを記す。

聖学院小学校の英語教育の特徴

聖学院小学校で筆者が取り組む英語教育は、3つの柱に整理できる。

1つ目は、リスニングをベースにコミュニケーションを楽しみながら4技能を身につける教育方法である。1年生からコアとなるテキストを使用

して十分なリスニング練習を行い、英語の音とリズムに慣れてから、アルファベット、フォニックス、単語、短文、ショートストーリーの読み書きを学ぶ。

2つ目は、異文化理解と日本の文化・習慣の発信である。発信型英語は、英語で自国の文化・習慣を伝えられるという誇りと自信を児童に与え、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成にもつながる。

3つ目は、他教科の内容を英語で学習するCLIL（内容言語統合型学習）である。実践例は表2のようにいくつかの教科にまたがり、内容は他教科のカリキュラムを踏まえて選択される。児童は、CLIL学習を通して、知識、興味を広げ、世界を意識し、コミュニケーションが活発になっている。

山梨県立大学での受け止めと展開

地域貢献プロジェクトの報告書には、ファシリテータとして参加された山梨県立大学の先生方がそれぞれの視点から所感を述べられた部分がある。2014年度報告書では、小学校教員が生徒役となって歌やチャンツ、ゲーム、アクティビティを楽しむ参加型ワークショップが新たな発見として受け止められるとともに、「演劇的要素」を多く含む英語学習に小学校教員の参加者が優れた特性を示すことなどが指摘された。2015年度報告書では、前

表1 小学校英語指導者育成セミナーの日程および内容

日付	内容
2014年11月10日	(研修プログラム準備のための講師勉強会)
2015年1月7日	日本の文化・習慣を英語で発信しよう／すぐに使えるアクティビティの紹介
2015年8月5日	理科と社会科の内容を取り入れた英語活動 (CLIL)、アクティビティの紹介
2016年1月23日	Hi Friends! and More : Making English Come Alive 家庭科の内容を取り入れた英語活動 (CLIL)、アクティビティ、歌、ゲーム、フォニックス
2016年7月2日	Stories, Songs, and Games for Elementary School Students 物語「桃太郎」をチャント・歌で語る
2017年1月28日	Teaching Classroom Subjects in English (CLIL) 物語「おむすびころりん」を感情を込めて表現する

表2 聖学院小学校のCLIL実践例

1年生

- 生活科：朝顔の栽培過程学習
- 算数：数／足し算／引き算

2年生

- 生活科：大豆の栽培・豆腐作り／大豆食品しらべ
- 算数：足し算・引き算・かけ算／時計の読み方／1年生の算数の文章問題

3年生

- 理科：チョウの一生・昆虫について／カエルの一生／日なたと日陰
- 算数：100までの数かけ算・割り算／長さ・重さの比較／簡単な文章問題

4年生

- 社会：地図記号と町のように／都道府県、農産物・特産物

5年生

- 社会：日本の文化・国土紹介
- 家庭科：食事のマナー／みそ汁の作り方／おにぎりの作り方／カレーの作り方

6年生

- 社会：世界の国々
- 家庭科：栄養のバランス／日本食について

その他：音楽科の題材や、色々なテーマを扱った題材多数

※ CLIL学習に使用する教材はオリジナルで、毎年新たに開発、追加している。

年度につづき、ジェスチャーを使った体感覚(kinesthetic)学習が児童の英語を支えていること、生活に密着した身近な素材を活かした教え方は小学校に限らず応用できること、他教科のカリキュラムと並行するCLILが児童の意欲を持続させていることなどが述べられた。

セミナーの一部は、地域に根差した英語教育のあり方にも参考にしていただけたところがあった。2015年7月のセミナーで、日本文化を題材にしたチャンツや日本紹介ABCカルタを繰り返し取り上げると、参加者がその場で地域のことを英語で言おうとしていた。また大学の先生も、地域に関連するチャンツ(風林火山)やご当地ABCカルタ(Yamanashi ABCs)なども新たに作成された(2015年度報告書, pp.23-25)。

山梨県立大学では、同じプロジェクトの一環として独自に山梨の民話を英語劇にする活動を進めており、セミナーは、そうした地域貢献活動ともゆるやかに連携している。

おわりに

小学校の外国語(英語)活動は2020年度から大きく変わる。小学校3年生から必修化され、5・6年では教科化され、時間数も大幅に増える。公立小学校では、外国人講師の確保や時間数、カリキュラム、教材など、さまざまな面で制約が多く、加えて「研究拠点校」とそれ以外の格差もあるという。私立小学校での実践を、すべての小学校で全く同じように行うことは難しい。

そのような中で、セミナー参加者の「楽しくためになる」「すぐに授業で使いたい」という感想は、筆者にとっては励みになっている。セミナーは、筆者と前出のブライアン・バード氏が日ごろ実践している英語教育を、小学校教員に体験していただくことが主たる内容であった。参加者がこの経験をそれぞれの教育現場でいかしてくだされれば、大きな喜びである。

謝辞

山梨県立大学の高野美千代准教授をはじめとする諸先生方に心より感謝の意を表します。

参考文献

山梨県立大学地域研究交流センター2014年度研究報告書「山梨県の小学校における「外国語活動」の効果的運営に関する実践的研究」、および2015年度報告書「同II」

(ふじわら・まちこ 聖学院大学総合研究所特任講師)